シンポジウム報告

越境文学の現況をめぐって

名古屋市立大学大学院
人間文化研究科
土屋勝彦（つちや・まさひこ）

二〇〇六年一二月一六日午後一時半から六時半までの五時間にわたって、科研費「越境する文学の総合的研究」グループによるシンポジウム「越境文学の現況をめぐって」が開催された。『亡命文学論』の沼野充義氏（東京大学大学院人文社会学系研究科教授）、『クレオール主義』の今福龍太氏（東京外国語大学大学院地域文化研究科教授）、『耳の悦楽』の西成彦氏（立命館大学大学院先端総合学術研究科教授）、『オムニフォン』の管啓次郎氏（明治大学教授）という、越境文学・文化研究者として第一線で活躍するパネリストを迎え、コーディネーター役を土屋が務めた。

まず土屋は、シンポジウムの趣旨説明の後、ドイツ語圏越境作家たちの現状をめぐって、越境文学の定義の変遷とトルコ系作家たちの文学活動を報告し、「国民文学」を変革しうる可能性を語った。（本号掲載論文参照）

沼野氏は、アメリカに亡命したソ連出身のブロツキーの亡命に関する五つの真実を紹介し、亡命者が過去への拘りや保守化に向かう一方で、言語というカプセルに乗って外の宇宙に向かっていく姿勢に着目する。こうした言語的越境は、リモーノフやアクショーノフなど混ぜ合わせのマカロニ言語派、ナボコフやクンデラのような切り替え言語派、ブロツキーのような機能的な切り替え言語派（エッセイと詩）、さらにドブラートフなど母語にとどまらざるを得ないグループに分けられる。ロシアの場合、多民族的国家であるがゆえに、所属民族と使用言語がずれていることがある。例えばニューヨークに亡命したドブラートフは、様々の血族が混交しているが、自らは職業的なロシア作家だという。異郷アブハジアを描くロシア語作家イスカンデールも同様である。また冷戦後ソ連が崩壊した結果、境界の見直しが全面的に起こっており、外部が消滅した今こそ新たなナショナリズム、境界を引きなおす動きが出てきている。チェチェン、グルジア、中央アジアなどのポストコロニアル的な状況の中で、本土と領土という関係が意識化されてきたが、ロシアの場合、自分の身体の延長のような他者の問題としてより複雑になっている。また亡命文学とロシア本土の文学とが合流して錯綜し、全体を俯瞰するのが難しいという。

次に今福氏は、そもそも文学は本質的に越境的であったというテーゼから始める。越境文学という概念を仕立てて何か新たなものが出てくるというよりも、むしろ一言語内にとどまっている言語行為にも、越境的な動きがあったと主張する。エリザベス・ビショフというアメリカ詩人の軌跡を追いながら、インターアメリカン、汎アメリカ大陸的な関係、反響としての様々な人物や土地を浮上させてみる。オクタビオ・パスがビショフを寡黙の詩人と評しているが、実際ビショフは、自身の詩集の量よりも、二十年近く暮らしたブラジル近現代詩の翻訳者としての訳詩量が多いほどである。彼女の育った北米ノバスコシア（一八世紀以降にアイルランド人やスコットランド人が入植していった）の特異な流動的離散的な風土が最初の詩の舞台であり、彼女の詩集は皆トポグラフィックなイマジネーションに刻印されており、自分の言語である英語のなかで疎外された経験を持っていた。その後キーウェストという中間的な南を経て、最終的に一九五一年ブラジルに出会い、バンデイラやアンドラーデなどの詩人たちと交流するなかで、ノバスコシアとブラジルが地勢的な融合をとげていく。ブラジルという言葉も、アイルランドの伝承にハイブラジルという桃源郷が出ており、後にポルトガル人によって発見されたときにブラジルウッドから由来するブラジルと命名された事柄とつながっていく。そうした地勢的な想像力こそ文学的な空間であり、地理的な越境性、流動性に逆向きに入っていく視点だとする。

西氏も、現代の越境文学に目を向

けることと、過去に書かれた国民文学として規範化された作品のなかに越境的なものを読み取ることが重要だと述べ、多和田葉子の『旅をする裸の目』を森鴎外の『舞姫』のパロディーと解釈した。これは、サンパウロ大学に行ったときに日系ブラジル人文学に触れる機会があり、『舞姫』をブラジル日系文学として読めないかと思ったのがきっかけである。つまり太田豊太郎も南米に渡った日本人をある意味で先取りする形で書いたと考えられる。一九四二年に書かれたカミュの『異邦人』を読んでも、当時はアルジェリア生まれのフランス人作家だという見方は知らなかったし、カフカがプラハのユダヤ系ドイツ人作家であることは意識しなかった。作品は絶えず新たに読み直されるべきである。独文学における越境性も、外国人によって担われる文学のみならず、ドイツ人自体の越境性を考えるべきである。ポーランドでは、すでに分割以前の一八世紀にドイツ人の利権拡大につれて、ユダヤネットワークなどドイツ人の影響力が強く、東ヨーロッパ全土に広がっていた。このように長い独文学史のなかでは、民族主義的な国民文学ではない越境性があった。従って現代のドイツ越境文学の状況は、むしろ本来の正常な姿に戻りつつある証だと考えられるという。

管氏は、まずラップ抒情詩人MCソラール、移民の住む公営住宅を舞台とする劇作家マリー・ンディアイ、コンゴ出身のアラン・マバンクーという三人の仏語越境作家を紹介した後、カリブ海文学の第一人者エドゥアール・グリッサンの『第四世紀』(一九六四年)を解釈した。この作品は、アフリカ系島人のコミュニティのなかから現出した世界という関係の錯綜体を、全体性において捉えなおそうとした強靭な想像力の冒険である。作品の主題を風景、名前、言語というポイントから分析すれば、本小説の最大の主題は、時間の空間化あるいは歴史の地理化というべき事態であり、線的な時間によって支配しようとする近代世界というシステムへの批判である。タイトルの第四世紀とは、一六三五年にフランスに併合され、物語の現在である一九四五年はこの植民地化の第四世紀が始まってまもない時期を示す。光や風、水や土に感応するのはグリッサンの文章の特徴であるが、すべての資格と来歴を剥奪されてエレメントの世界にぶつかることを繰り返す中で、歴史認識に新たな方法論を与えている。行政と商業の通常のクロノロジーを離れ、土地に根ざす独自の論理を発見し、文書の歴史に現れない忘れられた生の軌跡を見抜く視線が見られる。島からの脱出を果たした作家が、世界と歴史に目覚め、脱出という自由にある種の心の負債を感じ、島がおかれた位置を巡る省察を言語化し、「過去の予言的なヴィジョン」を書き、消えた口承的記憶を文章化したのである。様々の言語が自分の傍らにあることを意識するグリッサンの多言語主義は「オムニフォン」と呼べるが、その理想は、むしろ理解不可能なものも含めて諸言語の滞在を許す書字テクスト「オムニグラフィー」に見出せる。多言語が多層的に共存する状態こそ文学であることをグリッサンの小説は教えてくれるという。

次に討論に入り、沼野氏と土屋が越境文学を論じる視点として、「母語以外で執筆する表現者」という定義を一応の前提としている(母語の定義は難しいが)のに対し、今福氏、西氏、管氏は越境文学の範囲を広く捉え、文学自体が越境的であるという視座から出発する。その後、越境、文学、母語など越境文学における根源的な諸問題について白熱した議論となったが、紙幅の関係で割愛する。

当日の参加者数は約三〇名と少なかったが、四名の個性豊かなパネリストを迎えて、熱心な参加者たちとの質疑応答を交え、充実した文学的時間を共有できたことを喜びたい。

なお、このシンポジウムの全記録は冊子としてまとめられる予定である。

シンポジウム当日の様子